

2025年6月1日（日）主日朝礼拝説教

『昇天とは』 井上隆晶牧師

使徒言行録1章3～11節、マルコによる福音書16章15～20節

①【神の右の座に着かれた＝王が戻られた】

今日はキリスト教の暦で「昇天祭」です。イエス様は復活してから40日間弟子たちに姿を現し、御自分が生きていることを証明された後、天に昇られました。それを昇天といいます。葬式でも「召天」と言いますが、漢字が違います。「召天」は死ぬことですが、「昇天」はキリストが元々おられた神の座に戻られたことを言います。使徒言行録に「イエスは弟子たちが見ているうちに、天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」（使徒1：10）とありますし、マルコ福音書では「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。」（マルコ16：19）とあり、使徒信条でも「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と告白されています。誰も神様の右の座にイエス様が着かれたのを見た者はいませんから、これは教会の信仰告白です。イエス様が神の右の座に座ったというのは、イエス様は父なる神様と同じ性質の神であり、神の右に座することは、裁きの全権を委ねられた天国の王であることを意味しています。

元々キリストは神の子ですから天の方なのです。地上に33年間仮住まいされましたが、地上で救いを成し遂げて懐かしいわが家に帰ったのです。だから「神の国の扉」が開いたのです。「お帰りなさいませ！」と行って天使たちと聖人たちが凱旋したキリストをお迎えしたのです。王が戻られたのです。王の帰還です。詩編にも「城門よ、頭を上げよ。とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。」（詩編24：7）と歌われています。私たちも同じなのです。地上が終わったから、余りとして天に行くのではなく、天から地に送られ、また天に帰るのです。「あなたは人を塵に返し、人の子よ、帰れと仰せになります。」（詩編90：3）と聖書に書かれています。地上は仮の宿であって、仕事が終わったら天に帰るのです。「私たちの本国は天にある」（フィリピ3：20）からです。

②【受肉、十字架、復活、昇天によって人間全体が救われた】

昇天はキリストがもともとのおられた神の玉座の右に戻られたことを祝うだけではありません。彼は御自身と一体になった人間の体を天に連れて戻られたのです。それはあなた自身のことです。昇天は、キリストの救いの最後の業であることを教えています。よく「十字架によって救われた」という人がいますが、それは救いの一部に過ぎません。キリストの受肉（クリスマス）、十字架、復活、昇天というすべての過程によって人間全体が救われるのです。キリストの受肉は救いの始まりであり、十字架によって罪を取り除き、復活によって死を取り除き、昇天によって人間性を天に引き上げ、完全に人間の救いが完成したのです。この一体の

神秘によって人の救いは完成します。神は人間にご自分を重ね合わされ、人間と一体になられます。そして人間の誕生から死までを同じようにご自身も体験し、それらを引き受けて、ご自身の中で癒すのです。ですから私たちは降誕～十字架～復活～昇天という一連のキリストの業によって救われるのです。これが伝統的な教会の教えです。キリストによって初めて人間の身体が天に昇ったのです。今まで誰も天に上ることはできませんでした。人間は死ねば、みな魂は天に上げられると思っている人が多いのですが、人間は自分の力では天に上れません。しかし降ってこられた方、すなわちキリストと一体になり、彼の肩にしっかりと担がれ、腕に抱かれ、彼によって神の国に連れて行ってもらうのです。

● 4世紀のニュッサのグレゴリオスはこう語ります。「さまよっている羊のもとへ、…ご自分の命を捨てるあの良い牧者が来られます。そして、さまよっている羊を見つけ、後に十字架をも担がれたその肩に見つけた羊を乗せ、乗せたその羊を天上のいのちへと導き入れてくださったのです。」

③【キリストは教会という体で今もあなたと共におられる】

天使は、弟子たちにいいました。「ガリラヤの人たち、なぜ、天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」(11節)「なぜ」とは奇妙な問いかけです。イエス様が去って行かれたので「ああ主は私たちから去られた。私たちは独りぼっちになった」と寂しく見上げていたわけです。しかし「なぜ天を見ているのか」という言葉をもって、天使たちは過ぎ去った過去ではなく、未来に目を向けなさい。未来を信じなさい、天ばかりでなく地上を見なさいと言っているようです。天使は、弟子たちにこういったのです。「イエス様が自分たちから遠くに去ってしまったと悲しんではならない。必ずイエス様は戻って来られて、目には見えないけれどもあなたがたと共におられます。」それはイエス様自身が弟子たちに言われた事でもあります。「私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20) 4世紀のアウグスティヌスはこう言っています。

● 「主は私たちの所に降って来られた時、天を去ったわけではなく、再び天に昇られた時も、私たちから身を引かれたものではありません。」

共におられるのですが、その有り様が変わったのです。今までは「肉体の姿」で共におられたのですが、これからは「教会という姿」で共にいて下さるのです。イエス様は神なので、地上で働くためには肉の体が必要であったように、教会という体で今は働いておられるのです。教会に来るとキリストを思い出す為のあらゆるものがあります。ですから教会に来た時、ここにキリストはおられると思わなければなりません。

● 先日、私は京都の河原町にある徳正寺という浄土真宗大谷派のお寺を見学しました。お寺の中には内陣と呼ばれる仏像が置かれている部屋が奥にあります。そ

の前に外陣と呼ばれる信徒さんが座る部屋があります。内陣は東大寺の金堂と同じだそうです。東大寺では大仏を真ん中にして四方に四天王、12 神将や観音などの仏像がずらりと並んでおり、人間が入る場所は僅かしかありません。それは金堂が「極楽浄土の世界」つまり天国の世界を現わしているそうです。その浄土の世界と、娑婆の世界（人間の世界）が、一つとなったのがお寺さんなのです。その内陣と外陣との境には「波の模様」が描かれています。天国の岸边と、この世という海は一つであって接しているということです。そして天国を彼岸と呼び、この世を此岸と呼びます。人はこの波打ち際で仏と出会うわけです。奥の部屋に掛け軸があり、仏像がない時は、この掛け軸の前でお祈りをしていたそうです。そこには「南無不可思議光如来」と書いてありました。「不思議な光である如来を信じます」という意味です。仏は不思議な光として現れたと言っているのです。

これは全くキリスト教と同じであって、びっくりしました。親鸞の教えはもともとキリスト教とまるで同じです。罪人も救われると教えます。どこかでつながっているのでしょうか。

天国は遙か遠くの世界にあるわけではありません。天国とこの世はつながっており、教会こそ天国とこの世が出会う場所であり、ここで神は人と出会うのです。天と地はキリストにあって神秘的に一つに結ばれました。キリスト自身が「天国」なのです。私たちが天に行けないので、その天国であるお方が、天から地に降って来てくださったのです。そして世の終わりまで共にいてくださいます。教会には「天国の門」があります。それは全ての人に開いているのです。教会は地に属する者を天に引き揚げる場、皆さんを神化、キリスト化する場所です。落ちてゆく私たちを受け止め、天に引き上げる場です。

●昔、神学校の時に、どうしても罪を犯してしまうので先生に相談に行きました。するとその先生は、「あんたの下には、キリストの手があるんだよ。罪を犯して落ちてもキリストの手の上に落ちるんだよ。もうそれ以上は落ちないんだから安心しなさい」と言われたことがあります。私は聖餐をいただいた時に、いつも「ああ、キリストはよくもこんな罪人の所まで降ってきて下さったものだ」と有難く感じるのです。

今日もキリストは皆さんを受け止め、高く引き上げて下さいます。それを感謝しましょう。